



TITLE:

資本主義の運動法則における論理的なものと歴史的なもの(二)

AUTHOR(S):

吉村, 達次

CITATION:

吉村, 達次. 資本主義の運動法則における論理的なものと歴史的なもの(二). 経済論叢 1959, 84(6): 399-418

ISSUE DATE:

1959-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/132725>

RIGHT:

經濟論叢

第八十四卷 第六號

故名譽教授神戸正雄博士遺影および筆蹟・原稿

統計学＝社会科学的認識手段論の

問題点……………大 橋 隆 憲 1

資本主義の運動法則における

論理的なものと歴史的なもの(二)…吉 村 達 次 17

急速税務減価償却をめぐる

所得税会計の保守主義……………高 寺 貞 男 37

ヘンリ・ジョージについての一考察…北 沢 康 男 55

ソースタイン・ヴェブレンに関する

一研究……………中 山 大 68

神戸正雄先生による

再保険特約方式の輸入……………佐 波 宣 平 85

記 事

神戸先生御逝去……………91

追 憶 文……………96

新 村 出	井 藤 半 弥	本 庄 栄 治 郎	小 島 昌 太 郎
石 川 興 二	嵯 川 虎 三	大 谷 政 敬	小 山 田 小 七
堀 江 保 藏	島 恭 彦	松 井 清	

昭和三十四年十二月

京 都 大 学 經 済 学 會

資本主義の運動法則における

論理的なものと歴史的なもの(二)

吉 村 達 次

四

一 マルクスは、第二章において本源的蓄積過程の具体的叙述を始めるに先立ち、その第一節のへき頭にそれまで述べてきた資本制生産過程の全分析との関連を次のようにのべている。

「如何にして、貨幣が資本に転化され、資本によって剰余価値がつくられ、また剰余価値からより多くの資本がつくられるかは、すでに述べた。しかるに、資本の蓄積は、剰余価値を前提とし、剰余価値は資本制生産を前提とし、資本制生産はまた、商品生産者たちの手における比較的多量の資本および労働力の現存を前提とする。この全運動は、だから、循環論法的に堂々めぐりをするように見えるのであって、それからのがれ出るためには、われわれは、資本制蓄積に先行する一の『本源的蓄積』(アダム・スミスのいう『先行的蓄積』)を、すなわち資本制生産様式の結果ではなくてその出発点の蓄積を、想定するほかはない」(資・I・一五六八頁)

すでに述べたように、資本制蓄積は、「資本の蓄積に照応する貧困の蓄積」という二者分裂的・敵対的性格をもたざるをえないのであるが、この貧富の敵対関係は、また逆に、資本蓄積を促進する要因として作用する。資本の

再生産過程は、このような敵対的性格をはらみつつ、あたかも無制限に拡張されるかのように見える。すなわち、資本の全運動過程は循環の形態をとるものとして、自己完結的に永遠に自発自展するかのごとくみえ、したがって、かの敵対的性格もまた永遠の自然法則のごとき外観をもつにいたる。この外観は、資本が自己の再生産軌道を確立したものと仮定されるかぎり、一応は避けがたい。しかるに、労働者階級にとっては、この資本蓄積の法則が人間の意志を超越した自然法則のように彼等に迫り来ることは、「貧困・労働苦・奴隷状態・無知・野蠻および道德的墮落」の状態に永遠に彼等が縛りつけられることを意味するものにはかならない。このことは、逆にいえば、労働者階級が自らを人間として現実的に解放しようとするならば、実践的には、この円環運動を打破し、そこから脱出しなければならぬ必然性におかれていることを意味し、また、理論的にも、資本蓄積の敵対的性格の発見に満足してはおれないことを意味する。

富と貧困の対立が必然的であるという結論だけをとっていえば、その根本原因をどこに見るかは別として、たとえば、ケインズ経済学も、やや異なる形ではあるが、「豊富の中の貧困」としてこの対立を把握しているのであって、マルクス経済学がもし分析をこの点でとどめたならば、自らを一切のブルジョア経済学から根本的に区別することはなおできないであろう。両者の決定的区別は、むしろ、この対立に対して、各々が依って立つ階級的立場からもつ相異なる利害関係に依じて、それから後につづく議論にもっとも明瞭に現れねばならないのである。何故なら、貧富の発生原因の説明そのものに、すでに、両者の差異が胚胎していることはいうまでもないが、その原因が正しく把握されたとしても、それによってかの対立の必然性が説明されるにすぎないならば、マルクス経済学といえども、なお上述のごとき循環論的欠陥を脱れることができないからである。結論がここで終らざるをえないこと自体、

原因の追求がなお不徹底であるということを意味するであろう。マルクス主義において構造分析的な客観主義が不徹底な唯物論として、批判されなければならない所以である。

「資本論」のこれまでの分析になおつきまとうこのような欠陥を克服し、経済学を質的に転換せしめるための決定的な契機がどのようなものでなくてはならないかは、すでに前節でしめしたところからも明らかであるが、マルクス自身ユートピアンを批判した「哲学の貧困」の中の次の一句でこれを示唆している。もともとこの書物では、プロレタリアートの代弁者であり、ブルジョア経済学のワク内でなしうる極限まで私有財産制度の秘密を曝露しながら、遂にブルジョア経済学の狭隘さから脱却できなかったものとして、ブルードンが批判されているのであるが、次の一句もこの点を背景にもっていることに注意しなければならない。

「経済学者がブルジョア階級の科学的代弁者なのと同様に、社会主義者と共産主義者とはプロレタリア階級の理論家なのである。プロレタリアートがいまだ、階級として自己を構成するほど十分に発展しておらず、したがってプロレタリアートとブルジョアジーとのたたかきもいまだ政治的性質をもたず、ブルジョア社会内部における生産力が、プロレタリアートの解放と新社会の形成に必要な物質的条件を予見させるほど十分に発展していないかぎり、これらの理論家は、被抑圧階級の必要に応じるための応急的体系を考えだし、刷新的な科学を追求する空想主義者にすぎない。しかし、歴史が進み、それと共にプロレタリアートのたたかきがいっ、そうくっ、きりと浮びあがるにつれ、彼らはもはや自分の頭の中に科学を求める必要はない、眼前に進行していることを把握し、その代弁者となればよいのである。彼等が科学を求め、体系だけをつくっているあいだは、彼等が闘争の初期にあるあいだは、彼らは、窮乏の中に窮乏のみを見て、旧社会をひっくりかえす破壊的・革命的方面に気がつかない。今や歴史的運動によって生み出された科学は、完全な知識をもって自ら歴史的運動に参加することにより、もはや独断的ではなくなり、革命的なものとなった」（哲学の貧困）

見られる通り、マルクスは、経済学の領域における理論的前進にとって労働者階級の実践が果すところの決定的な歴史的役割を強調しているのであるが、この際特に注意すべき点は、ここでマルクスは、経済学上のあれこれの命題についての理論的前進を問題にしているのではなく、労働者階級の革命的実践を理論的契機として導き入れることによって、従来の経済学が見落していたところの歴史の否定的・革命的方面を視野の中に引き入れ、経済学の立脚点をより高く、より根本的なところに引き上げ、社会に対するより広い展望を可能ならしめようとし、それによって、経済学が、独断論的な残渣を最後に払拭して、革命的なもの、歴史的实践の中で常により豊かになりえまたならねばならぬものとして、根本的に生れかわることを期したということである。

ところで、このことは、始めにかかげた引用文で、かの悪循環論から脱れるためには「本源的蓄積」を想定しなければならぬとしていることと、どのような関係をもつであらうか。

二 すなわち、未来を切り開こうとする労働者階級の要求から出発して、かの円環から脱け出そうとしながら、かえって、そのためには、資本制生産様式の発生史・前史たる「本源的蓄積過程」が分析されなければならない、というように議論が展開されていることは、一見奇妙に感じられないこともない。この疑問を解く鍵は、すぐひきつづいて、マルクスが、「この本源的蓄積が経済学において演ずる役割は、原罪が神学において演ずる役割とほぼ同じである、」というように、神学における原罪物語と比較しつつ、「本源的蓄積」分析の意義を述べていることの中にあたえられている。

古典派経済学やそれ以後の俗流経済学が、資本の起源を勤勉・節約という形而上学的動機に求め、資本制生産を人性の自然にもとづく永遠のものと考えたことは周知のことであるが、そこからさらに、「国民の富」に随伴する

「人民の貧困化」を宿命的なものとなす宿命論が、彼等の支配的な結論として導き出された。したがって、資本の起源の科学的証明が、経済学における形而上学、資本主義永遠説、貧困化宿命説を打破する上に決定的に重要な意義をもつにいたるのであるが、また、これによつてはじめて、マルクス経済学自身も、ブルジョア的経済学を根底から批判し尽すとともに、自己を独自のものとして確立することができたのである。

すでに述べたように、マルクスによる資本蓄積の一般法則の分析は、一方では、価値法則のもとで、所有と労働の分離がますます拡大再生産され、貧困が必然化されることを明かにしたが、他方では、蓄積の進行とともに、本源的資本が蓄積資本の中でしめる比重は量的には無視されうべきものとなるのに反比例して、本源的分離が蓄積の歴史の出発点としてかの分析の根底に横たわっているという事実が、かえつて重要な意味をもつて、再び前面に現れることを示唆した。しかるに、このことは論理的には次のことを意味する。これまでのところ、この「分離」は、単に事実あるいは与件として前提されるにとどまり、その歴史的発生の必然性については何らの論証も行われないうままに分析がすすめられてきたが、資本の直接的生産過程の分析が一応完了した今になって、全論証が循環論的な行詰りに直面せざるをえないことが明瞭になればなるほど、その根底に横たわる「事実」を未論証のままに放置していたことが、行詰りの原因として改めて、反省されねばならなくなつたといふことである。何故なら、この「事実」の存在を単に無批判的に確信するにとどまるならば、資本制生産様式の科学的分析が一応は正しく行われてきたにもかかわらず、最後のところで結局形而上学的独断につながらざるをえないものとなり、(ブルジョア経済学が出発点を原罪物語にもとめるのと本質的に異なるところはなく)、また、この「事実」の単に経験的な認識に満足するならば、これまでの全論述がそれ自体としては如何に厳密な論理的整合性をもつていても、経験的認識という

相対的で不確定な基礎の上に組み立てられた不安定な構築物にすぎないものとなり、不可知論に路を開くことになるからである。いずれにせよ科学的分析としては不徹底を脱れない。

したがって、資本制生産様式の基礎・前提・前史としての本源的蓄積を与件として鵜呑みにすることなく、科学的な分析によって法則的にこれを把握することによってのみ、これまでの全論理をより根本的な法則の上に基礎づけることをえて、形而上学的独断や不確定な経験的認識を排除し、科学としての経済学を徹底せしめることができるといわねばならないのである。この分析によって、資本の運動は、一方では、自足的運動としての外観を破られ、社会発展の根本的な法則に依拠する相対的一時的な運動形態にすぎないものとして、他方では、根本的法則の歴史的必然の結果として、またその絶対的な自己貫徹の産物にほかならないものとして把握されるのである。すなわち、資本に関する経済学体系が、自己完結的・自足的な体系として単に超越的なものに終ることなく、社会発展の歴史的現実的の科学の一部を構成するものとして、定着せしめられることを意味するのである。

このように、資本の運動がより根本的な世界史の発展法則の中に組み込まれることによって、さらに、次のことがいえるであろう。価値法則が支配し、人間の行動が物の人格化としてのみ現れるところの、資本の運動法則は、実は、人間行動を規制する絶対的な法則ではなく、その根底には、人間が、労働する人間として生産力の主体たるのみならず、歴史創造の主体としても行動するところの、社会発展の法則が作用しており、物の人格化としての行動形態は必然的なものではあるが、同時に一時的相対的な特殊歴史の形態にすぎない。したがって、労働者階級が、かの悪循環から主体的・実践的に脱出しようとすることは、空無な彼岸に浮遊することを意味せず、現実の此岸のより奥深いところに底流する歴史の根本法則に自らの行動を立脚せしめると共に、歴史的発展の主体としての自己

自身を回復することを意味する。そして、資本主義の生成がこうした人間の主体的行動に依存したということは、やがて資本主義を克服する過程でも人間行動の決定的役割が法則的必然として把握されうることを予想せしめるのである。

三 このように、資本の円環的運動の論理を資本発生 of 歴史的法則によって基礎づけることによって、経済学から形而上学が追放され、歴史科学としての経済学が最終的に確立されると考えられるのであるが、こうした科学の道行は、敢えて経済学にかぎらず、科学一般に共通のものにすぎない。たとえば、エンゲルスが「自然の弁証法」(マル・エン選集第十五卷一二頁)において述べている、ニュートンの天体力学とカントの星雲説との関係は、右のような経済学における論理的関連と同じ性質のものである。エンゲルスは、ニュートンの万有引力説が、結局は「神の最初の衝撃」を要請せざるをえなかったのに対し、カントの星雲説は、「地球と全太陽系は時間の経過と共に生成したもの」であるという仮説を立てることによって、「神の最初の衝撃」を必要なものとし、自然科学から形而上学を追放する上に大きな貢献をした、として後者の意義を高く評価している。このことは、エンゲルスによれば、科学の研究方法における機械論的方法から弁証法的方法への転換をしめすものにほかならないのであって、この転換によって、自然におけると同様に社会においても、歴史的発展の法則的把握が可能になる。すなわち、質の同一性・不変性を維持しつつ永遠に繰返される静態的循環運動は、実際は、質の飛躍的变化をふくむ、発展の一次的・相対的形態にすぎない、という運動一般の普遍的法則が社会にも妥当することが明かにされたのである。

エンゲルスは、自然科学の発達と形而上学の破端の関連について、さらに次のようにもいっているが、上述の議論の意味を一層明らかにしている。

「ふるい形而上学は、事物をできあがった既存のものとしてうけとっていたが、それは死んだ事物をも生きている事物をもできあがった既存の事物として研究していた自然科学から生じたものである。(このことは、もちろん、当時の自然科学が総じて自然の運動を問題にしなかったというのではなく、ただ、永遠の「円環的な運動」、したがって一步もすすまず、いつもくりかえして同じ結果を生みだすにすぎないような、運動だけを考えていたことを意味する。——「フォイエルバッハ論」四五三頁より引用者)。しかし、こうした事物の研究がある程度までさかえて決定的な進歩が可能になったときに、すなわちこの研究がこれらの事物とともに自然それ自身のうちにおこる変化過程についての体系的な研究(すなわち、事物の起源、発展およびこれら自然的で、ひとつの大きな全体に結びつける、関連についての科学——同上四八五頁より引用者)へと移行しうるにいたったときに、哲学の領域においても、ふるい形而上学の終焉のときがきた。」(エンゲルス「フォイエルバッハ論」マル・エン選集、第五卷四八五頁)

五

一 このように、本源の蓄積研究の論理的意義を明らかにしたのちに、次に、マルクスは、資本の歴史的発生の法則を現実の歴史過程の中に探求しなければならないのであるが、そこに見出されるものを、あらかじめ、次のように示唆している。

「現実の歴史においては、ひとの知ることく、征服や圧制や強盗殺人が、簡単にいえば暴力が、大きな役割を演じる。ものとしての経済学においては、昔から牧歌が支配的であった。正義と『労働』とが昔から唯一の致富手段であった、——もちろん『今年』はいつも例外であったが。事実、本源の蓄積の諸方法は、他の一切のものではあっても、牧歌的なものではなかったのだ。」

価値法則——實際は剰余価値法則であるが——にもとづいて行われる資本蓄積——資本の生産物としての剰余価値の資本への転化——は、資本制生産における蓄積の主要な支配的な形態であるが、古典学派は、これを人類の創生以来の永遠の法則たらしめるとともに、正義と公正の原理たる意義をもあたえた。したがって、この観点からは、暴力——征服・圧制・強盗殺人——による致富が、歴史のいづれかの時期に支配的であり、かつ、必然的法則的であったとすることは、経済学の純粹さを冒瀆するもののように思われるであろう。事実、彼等が、それを、神の見えざる手に導かれて構成される自然の秩序に反するもの、不正なもの、人為的なものとして排撃したことは、周知のごとくである。しかし、マルクスは、かかる暴力による致富を、決して、経済法則の作用を不純ならしめるもの、あるいは正義に反するものとは考えなかったばかりか、むしろ、暴力の経済的力能を正しく評価することによって、ブルジョア経済学の狹隘さを脱却しえたとさえ見ることができるのである。

エンゲルスは、道德的判断が歴史を理解する上に無力である所以を、逆説的に、善に対して悪もまた歴史の進歩の原動力たりうるというように主張することによって、次のように批判している。

「……フオイエルバッハがヘーゲルとくらべて平凡浅薄に見えるのは、善悪の対立のとりあつかいにかたにおいてである。ヘーゲルはこういつている——『人が、人間はうまれつき善であるというとき、その人はなにかひじょうに偉大なことでもいつているかのように信じている。だが、人間はうまれつき悪であるというとき、このことばでなにかはるかに偉大なことがいわれているのに、人はこのことを忘れてゐる。』ヘーゲルにあっては、悪は、歴史的発展の原動力がそのうちにあらわれる形式なのである。しかも、それには二重の意味があくまれている。すなわち、一つの意味では、あたらしい進歩はみな必然的に聖なるものになる冒瀆として、ほろびつつあるがしかも習慣によって神聖視されているふるい状態にたいする反逆として、あらわれる。

そして、他の意味では、階級対立の発生していらい、歴史的発展の原動力となっているものは、まさに、貪欲とか支配欲とかいう人間のわるい情欲であつて、たとえば封建制度とブルジョアジーとの歴史にその証拠が独特なかたちでたえずみられる。」(「フオイエルバッハ論」マル・エン選集第十五巻四七二—二頁)

ここで、エンゲルスが、実際にいわんとしたことは、現実の歴史においては、善は悪に、また逆に、悪は善に転化するものであり、その対立は相対的・一時的であるから、特定の歴史的行為を善または悪として固定的に判断し、それによつて歴史を切り刻むことは、真に歴史を正しく理解することはできないこと、歴史の弁証法的性格をしめそうとしたのである。そして、さらにこのような歴史観の観念論的性格に対しては、「歴史上に行動している人間の外見上のそしてまた現実的にもはたらいている諸動機がけつて歴史的で、ごとの終局の原因ではないということ、そしてこれらの諸動機の背後にさらに、べつの原動力があつてこれが探求さるべきである」(同上、四九二頁)、ということをもとめているところの、殊にヘーゲルによつて代表される歴史哲学」をむしろ高く評價したのである。そして、さらに、「現実の人間とその歴史的発展の学」(同上、四七七頁)としての、唯物史観の立場から、歴史の原動力を次のように規定した。

「近代の歴史においては……あらゆる政治的闘争(ここでは、正義が観念的原動力となり、強制力が現実的動力となる。……引用者)は階級闘争であり、そして階級の解放闘争はそれが必然的に政治的なかたちをとるにもかかわらず……結局は経済的解放(生産手段の所有形態の変換……引用者)を中心軸とするものである。」(同上、四九四頁)

これらの諸命題は、唯物史観の初歩的な公式であり、くどくど繰り返すまでもないことであるが、敢えてここにかけたのは、一度経済学の領域に入るならば、これらの点が必ずしも自明のことではないからである。価値

法則にもとづく致富を人性の自然にかなった唯一つの正当な方法と見なし、これに對して、暴力による致富の方法を不当なものとするような見解は論外とするも、前者の方法を純粹なもの、後者を不純なもの^註と見なし、後者を純粹經濟學の対象から排除する考え方は、今日でもかなり強固に残存しているからである。

もとより、価値法則による致富または資本蓄積は資本制生産の下における致富の独自の形態であり、その意味では、暴力による致富は二次的補助的なものであり、むしろ、資本主義に独自の致富方法の純粹な遂行を攪乱するものであるといえる。しかし、価値法則による致富は、すでに述べたことから明らかなように、真空中に孤立して進行するわけではない。資本制生産においてのみ支配的となる致富の特殊・歴史的形態にはかならず、社会発展の世界史的過程の中で生成し、發展し、消滅するものであり、むしろ、かかる特殊形態としてのみ、真に法則的たりうるのである。したがって、暴力的致富が、資本の前史において、「大きな役割を演」じ、近代資本制の生産——ここでは価値法則による致富が支配する——をその結果として生み出すことが実証され、それを資本主義の歴史的運動法則の不可欠の一要因と見なさざるをえないとしても、何ら經濟學に不純な要素をもち込むことにはならないであろう。しかし、そのためには、經濟學は資本制生産様式を単にそれ自体として取扱うのではなく、一の様式から他の様式への移行の過程において取扱うような、より広い、より根本的な立場に立つていることが必要なのである。そして、このような立場の轉換によつて、經濟學はかえつて、一層科學としての純粹さを貫きうることは、すでに触れたとおりである。むしろ、この轉換によつて、經濟學は、硬直的・一面的な抽象性を脱れ、資本主義の豊かな歴史的生命力をその躍動する姿において、純粹に把握することができるのである。

〔註〕 宇野弘藏氏は、周知のように、その独特の方法論から、經濟學を原理論・段階論・現状分析論の三つに分化されるのであ

るが、就中、原理論と段階論を区別される理由は、原理論においては、純粹な資本主義經濟法則を明らかにするものとして、純論的展開が可能である——すなわち法則的把握が可能である——のに対し、段階論においては、現実の歴史過程において國家の政策的干渉——強制力、暴力——によって經濟法則の純粹な作用がさまたげられ、したがって資本主義發展の諸段階の類型的把握のみが可能であり、諸段階をつらぬく法則的把握は不可能であるとされる点にある。ここに、純・不純の機械的対立を看取することは容易であらう。宇野氏をしてかかる三分化説をとらしめた根本的原因是、法則観における機械論的狹隘さであり、社會的發展法則の弁証法的性格の正しい理解が欠除していることにある、ということができであらう。

二 いうまでもなく、一般的には、暴力は、歴史の進展の一つの槓杆たりえても、決定的な原動力ではない。暴力が何を生み出さうかは、それが作用する歴史的時代における生産力の發展水準と、それに照応する生産の諸關係、兩者の矛盾の發展の度合に依存する。また、古い生産關係の維持に關心をもつ階級によって使用されるか、反對に、その破壊と新しい關係の創造に關心をもつ階級によって使用されるかに応じて、その歴史的意義を異にしたがつて、暴力による致富という場合にも、それによって維持されまたは生成を促進される生産關係の内容が問題である。ある意味では、価値法則にもとづく致富という場合にも、同様のことがいえるのであつて、古い封建的富農や地主の再生産にそれが奉仕する場合すらあり、不払労働による不払労働の搾取としての資本制的蓄積をもたらす場合もある。だからこそ、後者の場合の經濟的内容をより適確に表示するためには、価値法則では不十分となり、剰余価値法則にもとづく致富または蓄積という特殊な形式が必要となるのである。暴力による致富についても、それが如何なる生産關係の維持または促進に役立つかは、暴力そのものに依存するものではない。そこ、資本の創生期において暴力によってつくり出さるべき生産關係はどのようなものでなければならなかつたか、これが次に問題である。

マルクスは、本源的蓄積においては「暴力が大きな役割を演じた」ことを示唆したのちに、その方法によって実現さるべき本源的蓄積の内容を改めて述べている。

「だから、資本関係を創造する過程は、労働者を彼の労働諸条件の所有から分離する過程——すなわち、一方では社会的な生活手段および生産手段を資本に転化し、他方では直接的な生産者を賃労働者に転化する過程——以外の何ものでもありえない。だから、いわゆる本源的蓄積は、生産者と生産手段との歴史的な分離の過程以外の何ものでもない。それが『本源的』なものとして現象するのは、けだし、それが資本の・および資本に照応する生産様式の・前史を形成するからである。」（資・I・一五六八頁）

ところで、既に述べたように、このような「生産者と生産手段の歴史的な分離」、あるいは所有と労働の本源的な分離は、資本制生産に本源的に前提される商品生産——そこでは所有と労働の一致が想定されざるをえない——にあっては、「外的な基準」として現れた。このことは次のような意味をもつ。第一に、それは商品生産にとって外的であるといっても、本源的な商品生産が資本制商品生産に転化するための不可欠な条件であり、第二に、逆に不可欠な条件といっても、あくまで外的なものとして与えられるかぎり、資本制生産は、本源的な商品生産自身に内在的な諸法則の自己展開の結果として現れねばならない、ということである。資本の再生産軌道が確立された段階においては、日々繰り返される資本の循環運動につれて、単純商品の資本制的商品への転化が不斷に行われ、資本の蓄積は、資本制生産の結果たる剰余価値の資本への転化によって、すなわち、資本制生産の内在的法則そのものによって、拡大されるのであるから、本源的な資本蓄積は、資本制生産の発展にとって、もはやどうでもよいもの、外的で偶然的なものとなることはすでに述べたとおりである。すなわち、資本蓄積の法則が純粹化すればするほど、かえって、それを歴史的発展法則の上に定着せしめるためには、本源的蓄積の科学的検討が不可欠のものとなるが、

現実的存在としての本源の資本そのものはますます無意味な偶然なものとなるのである。現実の歴史過程において、本源の蓄積が、商品生産にとって外的でありながら、その資本制商品生産への転化にとって必然的なもの、不可欠なものとして意義をもちうるのは、資本制生産の歴史的發展過程の特定の時期——資本の本源の発生期にすぎない。しかし、この時期において、それが如何なる意味で、外的でしかも不可避的必然的であつたかは、改めて具体的な歴史過程に即して検討されねばならない。

三 資本制生産にとって、ある程度発達した商品生産の存在は、不可欠の歴史的前提であるが、今や、商品生産にとつて外的な本源の蓄積過程もまた、資本の前史として必然的なことが証明されねばならないわけである。しかるに、かかる歴史的前提としての本源の商品生産は、所有と労働の一致を想定せざるをえず、しかも、それ自体は、所有と労働の本源的分離を生み出す内在的要因をもたないから、所有と労働の分離としての本源の蓄積とは、単に外的に並存するだけでなく、排他的に対立する関係にあるといわねばならない。しかし同時に、この両者が歴史上のある時期に、不可避的に結合されるのでなければ、資本制の生産もまた必然的に生成するということがいえないであろう。もし、このように、相互に外的排他的存在する二要因が、特定の時期に偶然的に結合したにすぎないということになれば、資本主義の歴史の生成もまた偶然的なものとして認めようとするれば、すでに述べたように、結局はであろう。また、外的対立のままでその関係を必然的なものとして認めようとすれば、その根拠を形而上学的独断によるか、経験的認識に頼つてそう断定するだけのものとなる。こうした欠陥を脱れようと思えば、これらの両因子を必然的に外的対立において現れしめるより根本的な原因、あるいは内在的矛盾を探求されねばならない。そして、この内在的矛盾の展開としてかの外的対立がしめされるならば、外的対立物の相互

作用によって生ずる新たな結果は、実はその内在矛盾の結果にほかならないであろう。かくて、この矛盾は外的対立への転化を通じて自らを崩壊に導くと共に、質的に新たな矛盾を生み出してゆくのであって、かの外的対立、あるいは外的矛盾とみえたものは、その根底に作用しているところの、古い質から新しい質への移行過程に必然的に伴うところの一現象にすぎないものとなる。歴史のより深い根本的矛盾の立場からすれば、かの対立は、もはや単なる外的矛盾ではなくなり、内在的矛盾の自己展開過程そのものとなるのである。

すなわち、単にそれ自体として観察された資本主義に内在するところの運動法則という観点からは、外的なものに見えるものも、世界史の一般的な発展法則の一階程としてこれを見れば、封建制に内在する矛盾の必然的結果であるとともに、それを通して資本主義を生み出したかぎりもはや単なる外在的矛盾であることをやめる。かくて、本源的蓄積を、資本の前史として歴史に内在する必然的現象として把握することは、封建制から資本制への移行過程を追求することによってのみ可能となるといわねばならないのである。このように見て来るならば、「本源的蓄積」についてのさきのような概念的規定のうちに、次の一句がつづく所以も理解されるであろう。

「資本主義社会の経済的構造は封建社会の経済的構造から発出した。後者の分解が前者の諸要素を遊離させたのである。」(資本・一五七〇頁)

本源的蓄積過程、すなわち、資本制的生産諸要素の本源的遊離過程は、封建的生産様式から資本主義的生産様式への移行過程の必然的一契機として位置づけることによってのみ、法則的必然的な現象として把握されうるのである。このことは、裏返していえば、資本の生成・発展・消滅の過程を法則として、根底的に把握するためには不可避的に社会発展の歴史法則のなかにそれを組入れて考察しなければならないことを意味するものである。

第二節以下において、マルクスは、本源的蓄積過程の歴史的分析を、農奴制の崩壊の結果として、イングランドにおいては、一四世紀末から十五世紀末に広汎に発生した「自由で自営の農民たち」が、暴力的に土地を収奪されてゆく叙述をもつて始めるのであるが、この所有と労働の一致にもとづく「自由な」農民こそは、封建制の最後の経済的土台をなしたものであり、したがって、その崩壊は封建制を根底から掘り崩すこと以外のものではなかった。その廃墟の上に、やがて所有と労働の分離に基礎をおく資本制的農業が成長したかぎり、それは生産手段の所有形態を根本的に変革したものととして、生産様式の歴史的行をもたらす経済的革命であつた。そして、市民革命を頂点とする一連の政治的変革はこの過程の飛躍的前進に役立ったのである。具体的歴史的存在としての「自由な自営農民」は、それが農奴制崩壊の産物たるかぎりには、封建制の下での生産力発展に照応する封建的生産関係の適応形態にはかならず、小商品生産者としては、やがて資本制商品生産に成長・転化すべき萌芽をやどすとともに、所有と労働の緊密な結合を基礎とすることによって、商品生産の自由な発展を阻害し、封建的絶対主義の経済的・大衆的支柱たるものであつた。生産力と商品生産の発展は、それがなお右の結合を決定的に分解するにいたらず、絶対主義がその結合の維持に努めた場合は、商品生産はかえつて封建的地主・富農の新たな形態での再生産に奉仕さえするが、生産力の発展が、かの結合を断ち切り資本制商品生産の方向に踏み切ることを強制するにつれて、矛盾を暴力的に解決するものとして所有と労働の分離を強行するところの本源的蓄積過程が進行し、資本主義的發展への路を清掃してゆくのである。照込み運動はそのイギリスの形態であつた。

このようにみるならば、商品生産から資本制的商品生産への本源的移行過程は、実は封建的生産様式から資本制的生産様式への移行の一表現にすぎないものであり、歴史發展の根本矛盾たる生産力と生産関係の矛盾をその起動

力とするものであった。

封建制から資本主義への移行過程は、いうまでもなく、一面では封建制の崩壊過程であり、他面では資本制生産の生成過程である。すなわち、一面では、封建的隷属やギルド的強制からの生産者の解放であり、市民的自由の獲得であり、他面では、労働者階級が自己の生産手段と封建的保護を奪いとられ、その意味でフォーゲルフラインな無産者として新たな主人に隷従せざるをえない過程であり、人間による人間の自由な搾取によって、無制限な致富の可能性をえた産業資本家の勝利の過程であった。

このように移行過程は二面性をもち、両面の統一的把握によつて、移行の歴史的意義の正しい理解がえられることはいうまでもない。しかるに、資本主義を「正義と労働」の支配する社会としてえがき出そうとするブルジョアの弁護論者にとっては、封建的束縛からの解放という側面だけが重要なものとみなされる。これに反して、「血と火との文字をもって」のみ「人類の年代記に書き込まれ」うる資本関係創出の側面は無視された。しかし、労働者階級の観点からみれば、移行過程のこの側面は、「封建的搾取の資本制的搾取への転化」であり、「隷従の形態変換」にはかならない。また、一つの生産様式から他の生産様式への移行としての社会発展の法則にとつても、この側面こそ、過程の本質的内容をなすものであった。ただし、ここで搾取形態という場合、直接的生産過程における人間対人間の支配・隷従関係そのもの、およびその変換のみが問題とされていることに注意しなければならない。何故なら、資本論第一巻においては、資本の直接的生産過程、すなわち、資本対労働の直接的かつ根本的な関係がそれ自体として取扱われており、そしてその歴史的生成過程が今や問題となっているからである。かかる搾取関係の結果としての、あるいは、その客観的体化物としての剰余生産物の経済的形態規定の変化——封建的地代範疇か

ら利潤範疇または利潤の転化物としての近代的地代範疇への転換——は、当面の問題ではない。この点は「資本論」第三巻において、利潤とその諸形態の本質が明らかにされたのちに始めて、分析が可能となる。剰余価値の本質が剰余労働であり、この点では封建的地代と同一であること、ただ異なるところは、生産手段の所有形態の差違にもとづく、搾取形態の差違にすぎないことは、第一巻で明らかにされた。そして、今や、第一巻の末尾では、この相異なる搾取形態の移行が問題なのである。

もちろん搾取形態の変換という側面が如何に本質的なものであっても、移行過程をこの側面からだけ見ることは一面のたるを脱れない。この時期におけるすべての階級闘争は、資本と労働の搾取関係を本源的に創生しまたは促進するものであるが、同時に封建的束縛からの解放闘争としても意義をもつ。むしろ、闘争が後者の目的を實現する程度に応じて、前者のための闘争もまた飛躍的に前進するという関係にあることはいうまでもない。「自由な」農民は、商品生産の発展とともに、漸次資本主義的商品生産へと自然生長的に発展する傾向をしめし、また、貨幣経済の網目につつまれるにつれて、封建的絶対主義の収奪を一層加重され、封建制を自己の桎梏と感じ、その廃棄を求めた。しかし、その反面、封建制の崩壊そのものは、同時に小農民経営の破滅を促進し、その資本主義的分化を飛躍的に推進するところの決定的な跳躍台ともなる。それによって、この分化過程を推進する主要な手段として、農民からの暴力的土地収奪を誰ははかるところなく行う条件を与へたのであって、これによって資本制商品生産は嵐の如き発展が可能となったのである。

それにもかかわらず、マルクスが、小農民が封建制に対立する前者の側面については、全く触れず、後者の過程、それも農民からの暴力的土地収奪を主要楨杆とする労働者階級と資本家階級の本源的創出のみを取扱っているにす

ぎないのは、右の如き資本論第一巻の論理的視角によるものにすぎない。このために、移行過程の分析としては一面性を脱れないかの如く見えるのであるが、この歴史的存在としての自由な自営農民が上述の如き二重性をもつことが前提として与えられるならば、その崩壊と資本的関係への分化過程の分析は、自らその背景に、封建制との闘争、その崩壊を予想せしめるのであり、資本の生成過程を社会発展の根本的法則に結びつくものとして、理解するには充分なのである。

四 以上のように、第二章第一節において、マルクスは、まず本源的蓄積過程においては暴力的致富が大きな役割を演ずべきことを暗示したのちに、それによつて実現さるべき経済的内容を、生産者と生産手段の歴史的分離としてしめし、同時に、この分離過程は、封建制から資本主義の移行過程の一契機として考察さるべきこと、さらにこの移行過程の本質は、封建的搾取の資本制的搾取への転化にはかならないことをしめした。このように、この時期における暴力的致富の経済的内容の歴史的意義を明らかにしたのちに、次のように、この一節を結んでいる。

「本源的蓄積の歴史において劃期的なものはといえば、資本家階級の自己形成に槓杆として役立つ変革がすべて然りであるが、わけでも、多数の人間大衆が突然かつ暴力的に彼等の生活維持手段から引き離されて無一物 *One penny* なプロレタリアとして労働市場に抛り出される瞬間が、そうである。農村生産者すなわち農民からの土地収奪は、この全過程の基礎をなす……。」

ここでは、さらにかの搾取形態の変換の内容が一層具体的に述べられている。すなわち、本源的蓄積過程全体を通じてその基礎たるものとして、農民からの土地収奪をあげ、また、それに伴つて生ずるところの、プロレタリア階級の大規模な創出を突然かつ暴力的に遂行したところの諸変革を指摘している。そして、それらが以後における本源的蓄積過程の具体的分析の主要内容をなすことが示唆されているのである。

農民からの土地収奪は、直接には、生産者と生産手段の所有の一致から、両者の分離への転化であり、生産手段の所有形態の根本的変化を意味する。また、前者が封建制下の小農民として具体的歴史的存在であることからして、この所有形態の根本的変換が封建制から資本主義への移行の経済的本質をしめすことは、すでに述べたとおりである。したがって、それはブルジョア民主主義革命——封建制に対するブルジョアジーの一連の闘争をふくめて、——のものとも根本的な経済的内容をなすものでもあつた。そして、この経済的変革を遂行するにあたってブルジョアジー——またはその同伴者としてのブルジョア化する地主貴族——が採用する暴力的収奪の方法は、彼等の封建制に対する闘争の他の反面をなすものであつた。封建制に対しては妥協的に、農民および労働者階級に対しては血と火との文字をもつてのみ書きつづられようような方法によって。このことは、封建性から資本主義への歴史的移行にあたって、一般的に市民革命が不可避なごとく、生産手段の所有形態の暴力的転換が不可避であることをしめす。これによって、かの歴史的移行が単に促進されるというだけでなく、むしろ、はじめて現実化するものであり、革命的変革の過程は飛躍的にのみ進展することがしめされているのである。(未完)